

等覚寺千手観音菩薩像とその周辺

—三浦地方平安文化への一試論—

上 杉 孝 良*

The Senju Kannon Bosatsu at the Togakuji Temple
and its Strroundings

—A Tentative Theory to Culture of Heian
Period in Miura District—

Takayoshi UESUGI

は じ め に

現在の三浦地方における郷土文化史の総合的な研究と記述は、他の歴史部門の研究に比して、甚だ停滞しているようである。これは三浦地方に限らず、他の地方においても、同じような傾向がみられる。

近年地方史への関心はとみに強く、県史、市史、郷土誌等の多くの出版物を送り出し、その成果は、かなり学問的事業にまで高められている。しかし、一般通史に比して、文化部門の取扱いと、その出来栄は甚だ劣っているようである。これは文化史への配慮が甚だ少いためか、また、文化史は書きにくいという点などもあるだろうが、地方では郷土文化として、系統的に記述すべき史実が少いことも大きな理由である。

このような郷土文化の究明についての方法論として、すでに伊東多三郎氏は、文化財学と郷土史との結びつきを論じられている¹⁾。現在地方で盛んに行なわれている文化財の調査保存事業を通して、文化財に対する研究学問が進歩している現状である。このいわば文化財学を郷土史に充分活用すれば、地方の文化研究に良い結果をもたらすことができるというのである。

従来文化財の説明は、たいてい歴史的記述の外にはみだし、特別編で取り扱われることが多く、それもただ過去の文化遺産を鑑賞的な態度で記述するだけにとどまり、歴史全体の潮流の中での文化史記述から程遠いものであった。今後は氏のいわれる如く、積極的に郷土史における文化史の取扱いに、いわゆる文化財学を導入して、大いに工夫をしていかねばならないであろう。

ことに地方における文化史のうち、平安文化については、一層その史実も少く、未解決の問題も多く残されているため、その研究は、あまり進捗していない現状である。このため地方史の記述の中で、平安文化史の部門は、殆んど取り上げられていないことが多い。三浦地方でもその例に洩れない。三浦地方は文化史のみでなく、通史についてもこの時代の史料は僅少で、歴史的事実を究明する研究と記述は少い。僅かに考古学的分野において、二・三の報告がされてきたに留まっている。

このため、前述の文化財調査の成果を活用して、郷土史におけるこの方面の空隙を幾分でも埋めることができればと、わたしが実地に調査した等覚寺の千手観音菩薩像を基にして、次に若干の考察をししてみた。独断・誤りも多いことと思うが、平安時代における三浦地方の文化史究明の一助にでもなれば幸いである。

* 横須賀市役所会計課

(1)

横須賀市久村にある日蓮宗等覚寺境内の観音堂に千手観音像が祀られている²⁾。この像はもと寺正面の向側丘腹にある御滝社の隣域にあった観音堂に祀られていたが、堂が廃された後、昭和5年に現在の地に新しく堂を建立し、移安されたものと伝える。像については、新編相模風土記稿（以下風土記という）久村の条に「観音堂 千手観音なり 歓喜天を腹籠とす 又二王の古像あり 近き頃迄常宝院と云当山修験住せしとなり」とあり、また、三浦古尋録にも「観音堂 千手観音 慈覚大師の作観音腹籠り歓喜天壺寸ニ分秘尊ノヨシ申ス……堂ヲ経塚山千手院ト云」と記されている³⁾。



等覚寺千手観音像

像は一木造り、彫眼、像高は108.8センチ。面部・肉身部の金箔は昭和5年の後補。衣文部は素地である。頭上化仏は別木で現在九面、手も別木で中央の二臂を加えて四二臂の通形である。全体に後補が著しく、化仏、面部、両肩から腕の部分、手、持物、天衣、足、台座などは後補である。特に面部は削り直したと見え、かなり尊容を損んでいる。しかし、腹部から裳裾にかけての裳の折返しや、二条の天衣等の造形に、古様をとどめており、平安中期頃の一般菩薩像の形式に類似している。

千手観音菩薩の信仰は、奈良時代後期に入唐僧玄昉によって、とりあげられたと思われ、日本霊

異記によれば、この時代にすでに庶民の間に弘まっていたらしい。平安時代に入っても引続き信仰されたが、中期以降には観音信仰の隆盛にともない、観音のうちでも最高の力をもつ観音として、千手観音信仰は急激に盛大となり、地方へも盛んに伝播し造像された。関東地方でも多くの遺例がみられるが、この地で千手観音信仰が受容され造像にうつされたのは、11世紀後半頃からのようである。遺存するものとしては、中禅寺立木観音、真福寺、慶覚院、宝城坊、栃木観音堂の千手観音像、大谷の石造観音像などがあり、これらを溯る遺例を見ないという⁴⁾。

等覚寺像は、全体的にずんぐりとした古朴な形姿をしており、その造型感覚は、中央の洗練された作品と違い野趣的である。この地方で制作されたものであろう。かなりの腐朽後補で原初の趣を損っているが、その造形は承徳2年(1098)の岩手成島毘沙門堂の伝阿弥陀如来像に近く、鎌倉杉本寺の十一面観音菩薩像(伝行基作)などよりは、幾分時代的に上るものと思われるが、11世紀後半から12世紀にかけての制作になるものであろう。

(2)

等覚寺千手観音像は、美術史的にも、また、歴史資料的にも優れた像ではない。しかし、平安時代の観音信仰と、この像を取巻く周囲の自然と事物に目をやれば、おのずとこの千手観音像に注意が、そそがれて良いであろう。

本像についての縁起・伝称の類は、僅かに前述の風土記や三浦古尋録などによって、江戸中期頃の此地における存在が知れるのみで、他は全く見当らない。が、此地に現存する平安時代後期の二王像や⁵⁾、経塚、丸山不動堂(廃堂、像は久里浜長安寺に移安)及び御滝社の平安期に及ぶ口碑伝説、また、久村入口の左手丘陵裾にある同時代の貝塚遺跡⁶⁾などによって、此地が平安時代には、かなり拓かれ文化的なふんいきを持っていたことが、うかがわれる。そして、一度定置された本尊は、廃仏か大火のような変動があっても、なお、むやみに遠隔の地に運ばれることはないのが、普通であるから、千手観音像が当初から、この久村の地に、前述の仏達と一諸に祀られ伝蔵されてきたとしても間違いでないであろう。

この久村は、東の一方が内川入江にひらき、他の三方を大塚台、久村台と呼ばれる山々に囲まれた偏狭の谷戸である。谷戸の大部分は水田で、畠は殆んど山の台地につくられている。この水田の用水には、谷戸奥の山より流れ出る小川(久村川)と、大塚台山裾にある「滝」といわれる湧水を主として利用している。この滝は、久村入口から左手の古道を、御滝社前に出て、間もなく登り行くと左手山裾にタブの大木があり、この根元の清水の湧出を云う。往古は地形上滝のように落下していたと思われるが、のちに地形を利用して、附近が水田として開発されたため、現在では普通の清泉とかわらない。清水の湧出量は、かなり多量で、四季を通じて涸れることなく、下の小川に流れ込んでおり、近くの滝本を家号とする旧家では、この水の一部を使用して、今でも生活している。

農耕民にとって、生産の根源である水に対する信仰は著しく、各地にその例をみるが、久村においても、この滝といわれる清泉に対する素朴な信仰が、古代からおこなわれていたと思われ、その中心が現在等覚寺に移安された千手観音像ではないかと考えられるのである。また、この像は平安時代辺鄙な東国地方にもたらされた中央の千手観音信仰を考えるうえで、好箇の資料であると思われる。

千手観音信仰を含めた観音信仰は、奈良時代から庶民的な信仰が行なわれており、ことに民間にあって山谷の幽処に棲み、あるいは諸国の霊地を遊行する行者僧たちによって、観音信仰は深く民間仏教の中に浸透した。とくに、国家仏教の末期から崩壊する平安中期頃にかけて観音信仰が盛んになるや、中央から遠く諸国の民衆の間に、殊に農耕民の間に広く普及し、中期以降に千手観音信

仰が盛行するや、これら民間布教者や庶民の手で千手観音の霊場が、続々と建つようになった。

このように、観音信仰が特に農耕民との結びつきが多く、生産と関係の深い水源の信仰につながっていたことを示す例は多い。殊に民間仏教的な性格が強く、聖、沙弥、持経者、修験者等の民間布教者の事蹟が多く伝えられている。

「東大寺要録」諸院章にある天地院は、行基が和銅元年に御笠山の安部氏社の北の高山半中に建立し、千手観音を祀ったといわれ、そこは、岩井川の水源の発する処であった。また、お水取りの行事で有名な東大寺二月堂については、「東大寺要録」の諸院章に「……堂辺可奉献閼水之由。所示告也。時尙有黑白二鶴。忽穿磐石。從地中出。飛居傍樹。從其二迹。甘泉湧出。泉水充万。則置作石。為閼伽井。其水澄映。世早無涸。……」と記されており、本尊観音菩薩（現本尊は秘仏であるが、二月堂に残る奈良期の光背の中央に千手観音が毛彫されていること等から、旧本尊は千手観音像ではないかといわれる。⁷⁾）と水との結びつきを述べている。この観音菩薩像に対する修法で名高い水取りの行事は、2月に行なわれ、それは全体として陽春の歓喜、即ち、暗い寒冷の冬が過ぎて、太陽が暖く照り輝き、万物が増殖・繁栄する陽春のよろこびを讃えたもので、古く仏教以前に起った農耕民の春の歓喜・踴躍をほぼそのまま儀式化して伝えているという⁸⁾。このように、千手観音信仰を含めた観音信仰は、仏教以前の原始信仰と結びついて、山谷の幽処に棲む神仙、もしくは「ひじり」などにより、民衆固有の盛産増殖、生命の根元への信仰として、広く都鄙の庶民の中に根を下していった。

「諸寺略記」にいう峯定寺の千手観音像は、その座下に石竇があり、そこから落ちる水滴が宛ら担溜の如く、之をもって閼伽に供し、之をもって盥滌に充てたとあるから、やはり清水の湧き出る幽処なることがわかる。また、大和の長谷寺も、大和平野を灌漑する大和川（上流は初瀬川）の水源地に位置し、附近の農耕民は川上の長谷寺の本尊十一面観音を雨乞いの神として崇めた⁹⁾。長谷寺の「ひじり」のひろめた仏教は、水源信仰による農耕生産の源泉としての信仰として、農民を主な受容者としていたと考えられる。長谷観音信仰の影響は、平安後期には、かなり東日本にも及んでいる。京都の清水寺の千手観音像も、水源地としての信仰に基づいていることは、「本朝神仙伝」や、森口奈良吉氏の研究「高僧延鎮と円生川上」によって知られる。

関東地方においても、観音信仰は、薬師信仰とともに、平安中期以降盛行し、畿内でのこのような信仰内容を伴って、各地に受容されたようだ。その例として千葉県五井郡海上村の引田蓮蔵院の聖観音像がある。この像は一本彫成の平安末期作で、いわゆる東国地方特有の鉈彫像である。このような像は、その作風からも、行者僧や遊行僧などによる制作であろうと推定されるものがある¹⁰⁾。この蓮蔵院の地は、附近の水源地になっており、背後の小山や、寺域から湧き出る清水が近くの水田に注いでおり、寺の縁起や地名からも、この観音像が、水神信仰に結ばれていることが良くわかり、古くから附近の農民達によって、篤い尊崇を受けていたという¹¹⁾。

この蓮蔵院の縁起詞書に「百尋の大蛇」とあるが、これは水との関係をしめすもので、今昔物語巻十三にも、天下旱魃で諸人が困っているとき、竜に願って雨を降せてもらったという説話があり、また、大和の木津川の水源地に当たっている室生寺でも、水の神の竜王の信仰がある。「本朝神仙伝」では阿蘇明神が九頭竜王の形を現し、ついで千手観音の真身を示したといい、千手観音が蛇身に繋がり水神との関係を思わせる。たとえば「大正蔵経図像」第六巻別紙一に交身の双蛇の上に安座する千手観音の像がある。

また、これら観音信仰は、生命の根元のやどる霊木崇拜と結びつくことが多く、像を霊木で造るという伝説をもっているものが多い。河内の剛林寺（藤井寺）、勝尾寺、紀伊の粉河寺、京都の行願寺等の千手観音像は「諸寺略記」などの史料によると霊木で作ったものといわれ、畿内に多くこの伝えがあるという¹²⁾。関東地方でも、霊木信仰に基づく造像の伝えは多く、前述の引田観音も縁起

によれば、霊木をもって像を刻むとあり、阪東三十三所札所の第一番、鎌倉の杉本寺十一面観音像も縁起に伝える。これら諸寺の縁起・伝称が、すべてその通りに信じられないことは言うまでもない。しかし、大体としては千手観音信仰を含む観音信仰が畿内から遠く諸国の民衆の間に、殊に農耕民の霊木崇拝と接合して、広く普及した情勢を良く反映するものと解されるのである。また、この霊木信仰を具現するものに立木仏がある。立木仏とは山上の巨木に霊性を認めて、これに仏像を彫ったもので、自然に神性を見る我国古来の原始信仰と民間仏教が結びついて成立したものであろう。その遺例としては、長野県更級郡の智識寺十一面観音像、栃木県日光市の中禅寺千手観音像等があり、これらも、平安時代後期を溯るものではないという¹⁸⁾。

観音像に関する水と霊木の信仰内容は、民衆信仰における、特に農耕民層の現世利益的な願いが、如実に示されており、生産の根源への崇拝、生産の豊饒を願う祈禱がこめられていたのであった。

久村における千手観音信仰も、この例外ではないと思われ、谷戸一帯に広がる水田耕地の灌漑用水、また飲料用水として、四季涸れることのないこの清泉から湧出する多量の水は、附近の農耕民の生活上、なくてはならない存在であったことは、その地形上も容易に想像できるところである。このような水源地は、農民にとっては、生産の根源であるから、そこを神聖な場所として、尊崇の念を寄せたであろうことは、前述の諸例で明らかなことである。そして水神信仰が生まれ、千手観音信仰と結合し、それが雨乞いの神としての信仰も、含めもっていたであろうことは、大和の長谷寺や、京都の清水寺などの観音信仰にその例があることで、久村の滝に対する信仰も、このような内容を伴って、人々に信仰されていたことは想像に難くない。このことを更に、明らかにするため、附近の御滝社との連りを考えてみよう。

(3)

御滝社は、風土記久村の条に「御滝社 村の鎮守なり、神跡木立像 例祭九月十八日」と記され、三浦古尋録では、幾分具体的に「鎮守御滝権現ノ社 是ハ御滝五郎ヲ祭ルト云……又社ノ側ニ滝アリ是ヲ祭トモ云 御滝五郎ノ城跡ハ下平作ニ有」という。この社にも縁起その他の文書類の伝存はなく、その草創についてもわからない。しかし、古尋録にいう「滝アリ是ヲ祭トモ云……」や、祭神を水速男命（此神については、よくわからないが、水神である水波能売神、水若酢命、沢女神など同意の神であろう）とすることなどから、この社が滝にもとづく水神信仰によって、開創されたのではないかと推定される。

すでに、古代において原始信仰、土俗信仰として、人々の生活を守る自然神の存在があり、これを祀り崇拝した例は各地にみられる。これら祭神に、仏教が民間に普遍的に浸透していった平安中期以降、当時盛大であった千手観音が、これに習合したと想定しても、この期における本地垂迹の著しい進展を考えれば大過ないものであろう。

更に、千手観音像と御滝社との関係を考えてみたいものに、社に伝わる口碑がある。これは三浦郡神社由緒記（三浦郡氏子総代会昭和10年刊）に収載されているもので、次のように記されている。

「村社 御滝社 祭神 滝口五郎盛定 水速男命 相殿 天神大神 例祭九月十八日

滝口盛定は、民部大輔藤原盛重の子にして、盛重は白河天皇に事へ高尾山に入って入道した。盛定は後三浦党の幕賓となって、平作に居住した。其の郎党捨平は嘗て盛定の父盛重の高尾山神護寺に参詣の帰るさい捨て上げて養育され、長じて盛定に仕事したるも、間もなく慢心主命に逆って手打になるところを海雲和尚の命乞によって救われ、伴われて久村の草庵に帰り行を修めた。

或る日、老桜に纏ふ蔓を抜きとると清泉の沸き出で滝となりて落つ。爾来水乏しき久村郷民は救われるに至った。

捨平は新田を開発して名主に挙げられ、滝本盛兼と名乗った。此の清泉の神木老桜の枯れた折盛兼は斎戒沐浴の上其の神木を以て恩主滝口盛定の像を彫り祠を建て、水神と祀って御滝権現と称へたとの口碑である。

此が久村の鎮守と崇められた。併し、文治年間の創祀との伝へもある」

この種の口碑伝説は、甚だ信憑性に乏しく、史料的にも、疑しいものが多い。これは、民間布教者である沙弥や優婆塞のような行者達の事蹟というものが、殆んど記録に残されず伝説として語り継がれ、それがかなり歪んだもので、後世物語として伝えられているものが多く、これもその一例と思われる。しかし、その内容によっては、真実を究明するについての或る程度の手掛かりとなるべきものを、見出すことも不可能でない。

即ち、この口碑の内容に、原初に近い言伝えと思われるものが見出される。それは「清泉の沸き出で滝となり」「神木を以て……像を彫り」及び「水神を祀って……」などである。これらの内容は、既に述べてきた如く、古代の観音信仰の多くに現れた信仰内容である。久村の農耕民が、滝と云われる実在の清泉に対する尊崇と、生産増殖を願う霊木信仰とを、千手観音信仰に結合させ、水神として祀ってきた。その千手観音像の造像縁起を、この口碑は大体において物語っているものではないかと思われる。と同時に「高尾山神護寺……云々」とあることによって、この千手観音像の信仰や、この周辺の変遷について、尠くなく推察できそうである。

平安時代の中央における観音信仰は、仏教が民衆化するに伴い、地方に伝播していった。殊に、民間布教者による活動が、平安後期に盛んであったことは、法華験記、本朝神仙伝、今昔物語等に詳しい。とくに、千手観音の信仰は、天台系の人々によって信仰されたらしく、地方における千手観音像の安置状態をみるならば、延暦寺系の山嶽修験者が祈念していたと想像されるものが、案外に多いことに気づくという¹⁴⁾。中央においても、西国三十三番の観音霊場の大部分は、修験者の開基になるもので、本尊の半数以上は、千手観音像である。ことに熊野を補陀落とする観音信仰は著しく、那智は三十三番の一番で、那智社の本地仏は、千手観音像を祀る。これら熊野信仰は、天台系統と結びついて、修験者による地方への弘布は、大いに進展した。このような、当時の観音信仰は、三浦地方にも影響していたであろうことは、想像に難くなく、久村の千手観音像の安置についても、民間布教者とくに修験者によって、原始的自然信仰に修験道的・密教的要素が加わった信仰に基づくものであったのであろう。これら山嶽修験系統の人々の活躍は、この地に遺る経塚の存在や、丸山不動の伝説によっても推測される。現在、これらの造営が平安後期にまでさかのぼることを想定する史料に欠けるが、近くの衣笠城跡にある平安後期の経塚や、金峯山蔵王権現社及び不動堂（別当大善寺を含めて）の平安期におよぶ縁起や、また、すでに水源地信仰のあった相模国大山に平安後期の経塚が営まれていた¹⁵⁾ ことなどから、尠くとも三浦地方においても、この期に、これら修験者の影響を、うけていたことは推定されるところである。

このように、平安後期の東国地方の例に洩れず久村の千手観音像は、天台系統の修験者によって、安置されたと考えられるが、しかし、先程の口碑によれば、「高尾神護寺……云々」に関する記述があり、また、風土記久村の観音堂の条にも「……近い頃迄常宝院と云当山修験住せしとなり」とあり、真言系統の伝えがこの地にあらわれている。そこで江戸中期頃の三浦郡における修験の分布を、風土記によってみると、当山派は 15 院を数え、本山派は僅かに 6 院である。これは、西浦賀叶明神社の別当感応院に伝わる文覚上人の伝説（風土記）などを含め、当山派修験のこの地方における隆盛ぶりをしめすものであろう。では、このように真言系統の修験が、天台系統にかわって、何時頃から盛んになったものであろうか。

平安時代においては、真言系の信仰を広める修験者の数は極めて少なかったと思われ、これは、中央の真言系美術にみられるように教理的な思想を背景とし、信仰に理論的な根拠をもたせること

に抱泥していたのではないかと考えられる。高野山の信仰が、地方にひろめられ弘法大師信仰が、日本全体に浸透したのは、鎌倉時代以後の高野聖の廻国修行によるものであるが、特に盛大になったのは、室町時代以後とみなければならないといわれ、この時期において、これらの人達は、天台系の修験者が開いた寺にも住みついて、以後真言系の寺院になったものも多いという¹⁶⁾。前述のように、平安時代の東国地方は、天台密教の伝播が盛んで、後期には多くの天台系寺院が創設されたが、鎌倉・室町時代に入ると、次第に真言系の行者僧や、他宗派の活動が隆盛となり、改宗されていった寺院が多かったようだ。三浦郡内だけでも古刹を誇る八ヶ寺もが、天台より改宗したことを風土記は伝えており、仏像の配列により、もと天台系統でなかったかと思われる寺院も二・三をかぞえる。これは真言寺院に比較すると、かなりの違いがわかり、現在、三浦地方（風土記にいう三浦郡内）における真言寺院は、16ヶ寺をかぞえるが、天台寺院は、逗子の神武寺と、その末院の2ヶ寺のみにすぎない。

これらの事柄から、御滝社の口碑や、西叶明神社の別当感応院の文覚上人伝説などの成立について、ある程度の事情や、その時期がうかがい知ることができる。

なお、三浦古尋録にいう滝本五郎（三浦郡神社由緒記では滝口五郎盛定）については、史料がなくてよくわからない。滝の隣傍に旧家の山田実氏宅があり、家号を滝本と称している。灌漑用水として、この滝の管理を執行してきた家柄であったと思われるが、滝本五郎との関係については不明である。ともあれ、中世から近世にかけて、久村の農民達が、伝説に基づいて、滝本五郎なる人物の徳を慕い、神として祀ったものであろう。

御滝社に伝わる口碑は、このように各時代を背景にして、種々の信仰の要素が重なり合いながら、一つの物語として、伝えられたものと思われる。が、本来その原初の言伝えは、平安時代後期久村の農民達の生産豊饒を願う原始信仰に、千手信仰を奉ずる修験者達の民間布教者によって、千手観音を結びつけ成立した、この場にまつわる活動の事蹟の説話であったものであろうと考えられる。

このような千手観音信仰の霊場の周辺に、これに関連すると思われる前述の、経塚と丸山不動跡がある。

経塚は旧観音堂跡の前方にあり、高さ2.5メートル、径3メートル程の円墳状のものである。周りはかなり崩されているが、頂上に小型の墓碑などを祀り、これが里人のいう経塚であることは、間違いないようである。風土記久村の条に「経塚 堂前（観音堂）にあり 高一丈経二間許」とあり、三浦古尋録には「此堂ノ前ナル小山ヲ経塚ト云先年今ノ堂再建ノ砌此処ヨリ瓶一ツ掘出ス中ニ書有朱ヲ以テ是ヲ詰テアリ其節雨中ニシテ其朱流レ出辺紅ノ色ヲナス里民驚キ逃去又其書朽テ不分平ノ一字而已瓶ニツキ有シト云其瓶今アリ……」と記している。瓶の中に経巻を入れ、埋納したもので、中に朱が詰めてあったようである。朱を入れたとみられる例は、衣笠城跡の経塚より発見された経筒にもみられる。古尋録に出土瓶の写絵が画かれており、この瓶は近年まで御滝社に保存されていたというが¹⁷⁾、現在では全くわからない。絵によると広口の甕状で、鼠色とあり、草文様のものが画かれているが定かでない。常滑製のものであろうか。ともあれ、千手観音像を祀った清浄の地に、経塚を造営したことは明確である。また、神社前方の丸山の地に不動明王を祀ったことが知られる。三浦古尋録に「……往昔ハ此山丸山ノ不動ト云テ伽藍地ナリ今其時ノ金剛ノ二像大破ニナリテ観音ノ堂中ニ有テ其不動尊何ノコロ移シケルニヤ八幡ノ長安寺ニ有テ長安寺ノ不動ト申スヨシ金剛不動トモ運慶ノ作ト云」といわれているもので、久里浜長安寺は、天文2年の草創と伝えているから、尠くとも、それ以前は、丸山の地に安置されていたものであろう。移安された不動明王像は、現在秘仏で拝見することができない。このように、経塚や不動堂の造営については、明確な史料がなく、わからないが、千手観音信仰と同じく、やはり民間布教者達の活動によって営まれたと思われる、とくに修験に結びついていたのではないだろうか。経塚の分布は、修験の道に沿っているものが多

いことも指摘されている¹⁸⁾。

以上のように、久村等覚寺に安置される千手観音菩薩は、久村の農耕民の滝といわれる清泉に対する素朴な水源地信仰に、平安時代の観音菩薩の現世利益的信仰が習合し、天台系統の修験者達によって、この地に祀られ、水の神、雨乞の神として尊崇されたものであろう。鎌倉時代後期以降は、ようやく天台系統にかわって、真言系統の弘布が盛んで、この地及びこの地方は当山派の修験者の活動の場であり、御滝社の口碑は、その事情を伝えて、その成立の時期を、ほぼ明らかにしているのではなからうか。

む す び

三浦地方の片隅に祀られている平安後期の千手観音像について考察してきたが、その信仰内容は、国家や貴族に依拠するものではなく、都鄙の庶民とくに農耕民層における原始的自然信仰と現世利益的な仏教との習合にもとづくものであると思われ、それが具現的には、千手信仰を含む観音信仰としてあらわされていると考えられる。そして、その信仰の種々相をとおして、農耕民の生命の根元である水源地の尊崇に由来すると思われる本像の水神・雨乞の神への性格に考え及んだ。

これら平安時代の観音信仰を、民間的仏教として弘布したであろうと考えられる山嶽修験者を含む民間布教者の事蹟を、此地の遺跡・伝承より述べてみたが、修験者等の活躍は、経塚関係その他の発展とも併せ考えるうえで、重要な要素と思われるが、いまだこの分野は十分な考究がされていない。今後、地方における観音信仰及びこれら民間布教者の活動についての、詳細な考究が積み重ねられていくなれば、その実態は容易に明らかにされるであろう。

わたくしが、この地の千手観音信仰についての考えが及んだのは、いまだ久村の地が、幾分でも千年来の村落の雰囲気を残していたからである。しかし、この様な古来の環境も、最近の都市周辺の宅地化・工業化の開発ブームで益々減少の一途をたどっている。久村も最近の開発が著しく、水田や台地の宅地化などで、ここ数年で全くその地形と環境を変えてしまうと思われる。このような例は、昨今各地に多く見られると思うが、今のうちに古来の雰囲気に接し、土地に密着した歴史・文化の諸現象を記録しておくことが必要である。

平安時代の遺物として、三浦地方に関するもので、実地に調査した彫刻その他工芸品は 17 点にのぼる。何れも、この地方の平安文化を考えるうえで重要な文化財である。これらを唯、単なる鑑賞的・文化的紹介に留めず、地方史の潮流の中での位置づけを明確にし、地方文化の考究に役立たせねばならない。この意義から、一つの問題提起として久村の等覚寺千手観音像を取り上げてみた。

諸先学のご叱正、ご教示をたまわれれば幸いである。

注

- 1) 伊東多三郎「文化史における地方文化の問題」(『日本歴史』第 248 号)
- 2) 拙稿「横須賀の仏像彫刻(上)」(『三浦古文化』第 2 号昭和 42 年 4 月) 参照。
- 3) 観音菩薩は歓喜天の障碍を避けるため安置される場合もあるというが、これは中世以降といわれるので(佐和隆研著「日本密教 その展開と美術」)ここでは特に触れないで、別の機会にゆずりたい。
- 4) 久野 健氏「関東古代彫刻史論」(『関東彫刻の研究』昭和 39 年刊) 学生社
- 5) 拙稿前掲論文
- 6) 赤星直忠氏のご教示による。
- 7) 福山博士「東大寺の規模」(『国分寺の研究』昭和 13 年)
- 8) 小林太市郎氏「千手信仰の民間潮流」(『仏教芸術』36 号昭和 33 年 10 月)
- 9) 石田茂作氏「長谷寺の沿革と其の文化財」(『大和文化研究』5-2 昭和 35 年)
- 10) 久野 健氏「行者系の彫刻」(『ミュージアム』130 号 昭和 37 年)
- 11) 鶴岡静夫氏著「日本古代仏教史の研究」昭和 37 年 9 月刊
- 12) 小林太市郎氏前掲論文

- 13) 久野 健氏「立木仏について」(『美術研究』217 号昭和 36 年)
佐和隆研氏著「日本密教 その展開と美術」昭和 41 年 10 月刊
- 14) 佐和隆研氏前掲著
- 15) 大場磐雄氏「関東に於ける修験道流布の考古学的一考察」(『神道考古学論考』昭和 18 年刊)
- 16) 佐和隆研氏前掲著
- 17) 北村包直氏著「三浦大介及三浦党」大正 14 年 6 月刊
- 18) 石田茂作「越中日石寺裏山経塚」(『考古学雑誌』42-4 昭和 32 年)